

第6章 ナーラダとヴァーサデーヴァの会話

第1節

सूत उवाच

एवं निशम्य भगवान्देवर्षेर्जन्म कर्म च ।
भूयः पप्रच्छ तं ब्रह्मन् व्यासः सत्यवतीसुतः ॥ १ ॥

スーता ウヴァーチャ
sūta uvāca

エーヴァンム ニシャミヤ バハガヴァーン
evam niśamya bhagavān

デーヴァルシェール ジャンマ カルマ チャ
devarṣer janma karma ca

ブフーヤハ パプラच्छा タンム ब्राह्मन्
bhūyaḥ pāpraccha tam brahman

ヴァーサハ サチャヴァティー・スタハ
vyāsaḥ satyavatī-sutaḥ

sūtaḥ uvāca—スータが言った; *evam*—そのように; *niśamya*—聞くこと; *bhagavān*—神の力強い化身; *devarṣeḥ*—神々の中の偉大な聖者; *janma*—誕生; *karma*—活動; *ca*—そして; *bhūyaḥ*—再び; *pāpraccha*—尋ねた; *tam*—彼に; *brahman*—おお、ブラーフマナ達よ; *vyāsaḥ*—ヴァーサデーヴァ; *satyavatī-sutaḥ*—サチャヴァティーの子。

スータが言った。「ブラーフマナたちよ。神の化身であり、そしてサチャヴァティーの子であるヴァーサデーヴァは、シュリー・ナーラダの誕生と活動について余すところなく拝聴したあと、次のように尋ねた」

要旨解説

ヴァーサデーヴァはナーラダジーが到達した完成について、さらにはその人となりについてもっと詳しく知りたいと願いました。この章でナーラダジーは、主との超越的な離別感に浸っていたときに（それはひじょうに悲しい心情なのですが）、主を垣間見ることができたいきさつを説明します。

第2節

व्यास उवाच

भिक्षुभिर्विप्रवसिते विज्ञानादेष्टुभिस्तव ।
वर्तमानो वयस्याद्ये ततः किमकरोद्भवान् ॥ २ ॥

ヴァーサ ウヴァーチャ

vyāsa uvāca

ビヒクシュビヒル ヴィプラヴァシテ

bhikṣubhir vipravasite

ヴィギャーナーデーシュトウリビヒス タヴァ

vijñānādeṣṭṛbhis tava

ヴァルタマーノー ヴァヤッシ アーデュー

vartamāno vayasī ādye

タタハ キンム アカロドゥ バハヴァーン

tataḥ kim akarod bhavān

vyāsaḥ uvāca—シュリー・ヴァーサデーヴァが言った; bhikṣubhiḥ—偉大な修行僧達によって; vipravasite—別の場所に去って; vijñāna—超越性に関する科学的知識; ādeṣṭṛbhiḥ—教えた人々; tava—あなたの; vartamānaḥ—現在の; vayasī—生涯の; ādye—～の始まりの前; tataḥ—その後; kim—なにが; akarot—行なった; bhavān—あなた。

シュリー・ヴァーサデーヴァが言った。「前世で、科学的で神聖な知識を説いた偉大な聖者たちが去っていったあと、あなた（ナーラダ）はなにをなさったのでしょうか」

要旨解説

ヴァーサデーヴァはナーラダジーの弟子ですから、ナーラダが入門後にしたことについて知りたいと思うのは自然なことです。ナーラダの足跡に従って同じ境地に辿りつきたいと考えたのです。精神指導者に尋ねようとする望みは、献愛生活を完成させるためには欠かせません。この見解をサンスクリット語でsad-dharma-ṛcchā (サドゥ・ダハルマ・プリッチャー) といいます。

第3節

स्वयम्भुव कया वृत्त्या वर्तितं ते परं वयः ।
कथं चेदमुदसाक्षीः काले प्राप्ते कलेवरम् ॥ ३ ॥

スヴァーヤンブヴァ カヤー ヴリッテヤー
svāyambhuva kayā vṛtṭyā

ヴァリタンム テー パランム ヴァヤハ
vartitaṁ te param vayah

カタハンム チューダンム ウダスラークシーヒ
kathaṁ cedam udasrākṣiḥ

カーレー プラプテー カレーヴァランム
kāle prāpte kalevaram

svāyambhuva—ブラフマーの子よ; kayā—どのような状況で; vṛtṭyā—任務; vartitaṁ—過ごした; te—あなた; param—入門の後; vayah—生涯; katham—どのように; ca—そして; idam—この; udasrākṣiḥ—終えたのか; kāle—やがて; prāpte—達成して; kalevaram—肉体。

ブラフマーの御子息よ。入門を受けたあとはどのように過ごされたのでしょうか。そしてやがてその体を終えたあと、どのようにしていまの体を得られたのでしょうか。

要旨解説

シュリー・ナーラダ・ムニは前世で平凡な下女の息子でしたから、永遠の命・至福・知識にあふれた精神的体に完全に変貌した事実を知るのは、確かに重要です。シュリー・ヴァーサデーヴァは、すべての人がその話を聞いて満足できるよう、ナーラダ・ムニにすべてを説明してほしいと願いました。

第4節

प्राकृत्यविषयामेतां स्मृतिं ते मुनिसत्तम ।
न ह्येष व्यवधात्काल एष सर्वनिराकृतिः ॥ ४ ॥

プラーク・カルパ・ヴィシャヤーンム エータンム
prāk-kalpa-viṣayām etāṁ

スムリティンム テー ムニ・サッタマ
smṛtiṁ te muni-sattama

ナ ヒ エーシャ ヴァヴァダハートウ カーラ
na hy eṣa vyavadhāt kāla

エーシャ サルヴァ・ニラークリティヒ
eṣa sarva-nirākṛtiḥ

prāk—先の; *kalpa*—ブラフマーの1日の間; *viṣayām*—主題; *etām*—これらすべて; *smṛtim*—記憶; *te*—あなたの; *muni-sattama*—偉大な聖者よ; *na*—ではない; *hi*—確かに; *eṣaḥ*—これらすべて; *vyavadhāt*—なんの違いもない; *kālah*—時の流れ; *eṣaḥ*—これらすべて; *sarva*—すべて; *nirākṛtiḥ*—破壊。

偉大な聖者よ。時はすべてを破壊します。それでも、ブラフマーのいまの1日以前に起こったこの出来事が、時の力に影響されずにあなたの記憶に新しいのは、なぜなのでしょう。

要旨解説

肉体が消滅しても魂は消えないように、精神的な意識も消滅しません。シュリー・ナーラダは前代のカルパ・創造期に生きていたときにでさえ、この精神的意識を持っていました。肉体意識とは、肉体をとおして表わされる精神的意識を指します。その質は劣り、歪み、やがて消滅します。しかし、精神的状態にある心を超越した超意識は、精神魂と同じで、けっして消滅しません。

第5節

नारद उवाच

भिक्षुभिर्विप्रवसिते विज्ञानादेष्टुभिर्मम ।
वर्तमानो वयस्याद्ये तत एतदकारणम् ॥ ५ ॥

ナーラダ ウヴァーチャ
nārada uvāca

ビヒクシュビヒル ヴィプラヴァシテー
bhikṣubhir vipravasite

ヴィギャーナーデーシュトウリビヒル ママ
viṅṅānādeṣṭṛbhir mama

ヴァルタマーノー ヴァヤッシ アーデュー
vartamāno vayasya ādye

タタ エータドゥ アカーラシャンム
tata etad akāraṣam

nāradaḥ uvāca—シュリー・ナーラダが言った; *bhikṣubhiḥ*—偉大な聖者達によって; *vipravasite*—別の場所に去っていったあと; *viṅṅāna*—科学的かつ精神的知識; *ādeṣṭṛbhiḥ*—

私に授けた人々; *mama*—私のもの; *vartamānaḥ*—現在の; *vayasi ādye*—この生涯の前; *tataḥ*—その後; *etat*—これだけ; *akāraṣam*—行なった。

シュリー・ナーラダが言った。「私に崇高な科学的知識を授けた偉大な聖者たちは、新たな場所に向けて去っていった。私は残りの生涯を一人で過ごさなくてはならなかった」

要旨解説

ナーラダジーは、前世で偉大な聖者たちから崇高な知識を授かったとき、5歳の男の子にすぎませんでした。その後の生き方に明らかな変化が現れました。それこそが、真正な精神指導者から入門を授かったあとに見られる重要な証しです。献愛者との確かな交流は、神聖な悟りとなってすぐに変革をもたらします。シュリー・ナーラダ・ムニの前世でそれがどのように起こったのかが、この章で説明されていきます。

第6節

एकात्मजा मे जननी योषिन्मूढा च किङ्करी ।
मय्यात्मजेऽनन्यगतौ चक्रे स्नेहानुबन्धनम् ॥ ६ ॥

エーカートウマジャー メー ジャナニー
ekātmajā me jananī

ヨーシン ムーダハー チャ キンकारी
yoṣin mūdhā ca kiṅkarī

マイー アートウマジェー ナニヤ・ガタウ
mayy ātmaje 'nanya-gatau

チャクレー スネーハーヌバンダハナンム
cakre snehānubandhanam

eka-ātmajā—一人っ子だったために; *me*—私の; *jananī*—母; *yoṣit*—女性であること; *mūdhā*—愚かな; *ca*—そして; *kiṅkarī*—下女; *mayi*—私に; *ātmaje*—彼女の子どもであることから; *ananya-gatau*—ほかに保護者がいない者; *cakre*—それをした; *sneha-anubandhanam*—愛情の鎖でつながれて。

純朴で、また使用人にすぎなかった母にとって、私はたった一人の子だった。私以外に家族はなく、また自分を守ってくれる人もいなかった。母は、愛情という紐で私を縛りつけていた。

第7節

सास्वतन्त्रा न कल्पासीद्योगक्षेमं ममेच्छती ।
ईशस्य हि वशे लोको योषा दारुमयी यथा ॥ ७ ॥

サースヴァタントウラー ナ カルパーシードウ
sāsvatantrā na kalpāsīd

ヨーガ・クシェーマンム マメーツチャティ
yoga-kṣemam mamecchatī

イーシャツシャ ヒ ヴァシエー ローコー
īśasya hi vaśe loko

ヨーシャー ダールマイー ヤタハー
yoṣā dārumayī yathā

sā—彼女; asvatantrā—頼っていた; na—ではない; kalpā—できる; āsīt—であった;
yoga-kṣemam—維持; mama—私の; icchatī—望んでいても; īśasya—神意の; hi—のため;
vaśe—に支配されて; lokāḥ—だれもが; yoṣā—人形; dāru-mayī—木製の; yathā—〜と同じ。

母は私をまっとうに育てたがっていたが、自由の身ではなく、それもかなわなかった。世界はすべて至高主の意志で動いている。ゆえにだれであろうと、人形使いにあやつられる木の人形のように生きているのである。

第8節

अहं च तद्ब्रह्मकुले ऋषिवांस्तदुपेक्षया ।
दिग्देशकालाव्युत्पन्नो बालकः पञ्चहायनः ॥ ८ ॥

アハンム チャ タドゥ・ブラフマ・クレ
aham ca tad-brahma-kule

ウーシヴァーンムス タドゥ・ウペークシャヤー
ūṣivāms tad-upekṣayā

ディグ・デーシャ・カーラーヴェトウパンノー
dig-deśa-kālāvyutpanno

バーラカハ パンチャ・ハーヤナハ
bālakaḥ pañca-hāyanaḥ

aham—私; ca—もまた; tat—それ; brahma-kule—ブラーフマナの学校で; ūṣivān—住んだ; tat—彼女の; upekṣayā—～に頼って; dik-deśa—方角と国; kāla—時間; avyutpannaḥ—経験がまったくない; bālakaḥ—幼い子ども; pañca—5; hāyanaḥ—～才。

まだ幼い5才のころ、私はブラーフマナの学校に住んでいた。母の愛情にすぎり、異郷の地を踏んだことさえない子どもだった。

第9節

एकदा निर्गतां गेहाद्दुहन्तीं निशि गां पथि ।
सर्पोऽदशत्यदा स्पृष्टः कृपणां कालचोदितः ॥ ९ ॥

エーカダー ニルガターンム ゲーハードウ
ekadā nirgatām gehād

ドゥハンティーンム ニシ ガーンム パティ
duhantīm niśi gām pathi

サルポー ダシャトウ パダー スプリシュタハ
sarpo 'daśat padā sprṣṭaḥ

クリパナーンム カーラ・チョーディタハ
kṛpaṇām kāla-coditaḥ

ekadā—ある時; nirgatām—出かけて; gehāt—家から; duhantīm—牛乳絞りのために; niśi—夜; gām—牛; pathi—途中で; sarpaḥ—蛇; adaśat—噛まれて; padā—足を; sprṣṭaḥ—襲われて; kṛpaṇām—哀れな女性; kāla-coditaḥ—至高の時に影響されて。

ある夜、哀れな母は乳絞りに行く途中、蛇に足を噛まれた。至上の時が定めた宿命によって。

要旨解説

これが、真剣な魂を神に近づける手段です。かわいそうなこの男児は、我が子をいとおしむ母親だけに育てられていたのですが、それでも、その子を主の慈悲だけに身をゆだねさせるため、至高の意志によって母親はこの世から連れだされたのでした。

第10節

तदा तदहमीशस्य भक्तानां शमभीप्सतः ।
अनुग्रहं मन्यमानः प्रातिष्ठं दिशमुत्तराम् ॥ १० ॥

タダー タドウ アハンム イーシャツシャ
tadā tad aham īśasya

バハクターナーナム シヤナム アビヒーブサタハ
bhaktānām śam abhīpsataḥ

アヌグラハンム マニヤマーナハ
anugrahaṁ manyamānaḥ

プラーティシュタハンム デイシヤナム ウッタラーナム
prātiṣṭhaṁ diśam uttarām

tadā—その時; *tat*—それを; *aham*—私は; *īśasya*—主の; *bhaktānām*—献愛者の; *śam*—慈悲; *abhīpsataḥ*—望んでいる; *anugrahaṁ*—特別な恩恵; *manyamānaḥ*—そのように考えて; *prātiṣṭhaṁ*—離れた; *diśam uttarām*—北へ。

これは、いつでも献愛者に恵みをほどこす主の特別の慈悲にちがいない——そう考えた私は、北に向って旅立った。

要旨解説

主に堅い信念を持つ献愛者は、いつも主の優しさに導かれていることを知っています。ふつうの見方では数奇な、あるいは困難な状況だとしても、献愛者には主の特別の慈悲にほかなりません。通俗な繁栄はいわば物質的な熱にうかされている状態ですが、主の思いやりによって物質的な熱はやがて冷めていき、着実に精神的な健康に恵まれるようになります。一般の人はそれを誤解してしまうものです。

第 1 1 節

स्फीताञ्जनपदांस्तत्र पुरग्रामव्रजाकरान् ।
खेटखर्वटवाटीश्च वनान्युपवनानि च ॥ ११ ॥

スピヒーターン ジャナパダーナムス タトウラ
sphītāñ janapadāms tatra

ブラ・グラーマ・ヴラジャーカラーン
pura-grāma-vrajākarañ

ケヘータ・カハルヴァタ・ヴァーティーシュ チャ
kheṭa-kharvaṭa-vāṭīś ca

ヴァナーニ ウパヴァナーニ チャ
vanāny upavanāni ca

sphītān—非常に栄えている; jana-padān—大都市; tatra—そこ; pura—町; grāma—村; vraja—広大な農場; ākarān—鉱物の場所（鉱山）; khetā—農耕地; kharvaṭa—谷; vāṭiḥ—花畑; ca—そして; vanāni—森; upavanāni—種苗場; ca—そして。

旅に出たあと、にぎわう大都市、町や村、牧草地帯、鉱山、農場、谷間、花畑、種苗場、原生林などをいくつもめぐり歩いた。

要旨解説

人類が農業・鉱業・農場経営・工場・園芸などにたずさわっている様子は、昔もいまも同じです。先代の創造期からいまの創造期でも、そして次の創造期にまで同様の営みはつづけられるのです。何億何千年後、自然の法則によって次の創造期がはじまり、ふたたび同じような宇宙の歴史が繰り返されます。俗な口論しかできない人々は、生活に欠かせない事には見向きもせず、遺跡の発掘調査のためならいくらでも時間を浪費します。シュリー・ナーラダ・ムニは、精神生活をはじめの決意を固めたあと、小さな子どもではありましたが、一瞬たりとも時間を無駄にすることなく、町や村、鉱山や工場をとおりすぎていきました。崇高な解放の境地をめざして歩きとおしたのです。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、数億年前に起こった歴史を反復・記録したものです。この節で述べられているように、この真正な書物にはもっとも重要な史実だけが選ばれ、記録されています。

第12節

चित्रधातुविचित्राद्रीनिभग्रभुजद्रुमान् ।
जलाशयाञ्छिवजलान्निनीः सुरसेविताः ।
चित्रस्वनैः पत्ररथैर्विभ्रमद्भ्रमरश्रियः ॥ १२ ॥

チトウラ・ダハートウ・ヴィチトウラードウリーン
citra-dhātu-vicitrādrīn

イバハ・バハグナ・ブッジャ・ドウルマーン
ibha-bhagna-bhuja-drumān

ジャラーシャヤーン チヴァ・ジャラーン
jalāśayāñ chiva-jalān

ナリニーヒ スラ・セーヴィターハ
naliniḥ sura-sevitāḥ

チトゥラ・スヴァナイヒ パトゥラ・ラタハイル
citra-svanaiḥ patra-rathair

ヴィブフラマドゥ ブフラマラ・シュリヤハ
vibhramad bhramara-śriyah

citra-dhātu—金、銀、銅などの重要な鉱物; vicitra—多様性あふれた; adriṁ—丘や山; ibha-bhagna—巨象によって破壊された; bhuja—枝; drumān—木々; jalāśayān śiva—健康に寄与する; jalān—水源地; nalinīḥ—蓮華の花; sura-sevitāḥ—天上の住民が憧れる; citra-svanaiḥ—心を満たしてくれる; patra-rathaiḥ—鳥達によって; vibhramat—落ち着きを失った; bhramara-śriyah—ハチの群れに飾られて。

私は、金、銀、銅などさまざまな鉱山資源を豊かに蔵する丘や山をとおりすぎた。さらに、美しい蓮華の花が咲きみだれ、狂おしく飛びまわるハチやさえずる鳥によって飾られた湖が点在する、まさに天上の住民が住むにふさわしい一帯をとおりすぎた。

第13節

नलवेणुशरस्तन्बकुशकीचकगह्वरम् ।
एक एवातियातोऽहमद्राक्षं विपिनं महत् ।
घोरं प्रतिभयाकारं व्यालोलूकशिवाजिरम् ॥ १३ ॥

ナラ・ヴェーヌ・シャラス・タンバ・
nala-veṇu-śaras-tanba-

クシャ・キーチャカ・ガフヴァランム
kuśa-kīcaka-gahvaram

エーカ エーヴァーティヤートー ハンム
eka evātiyāto 'ham

アドウラークシャンム ヴィピナム マハトウ
adrākṣaṁ vipinaṁ mahat

ゴホーランム プラティバハヤーカーラム
ghoraṁ pratibhayākāraṁ

ヴァーロールーカ・シヴァージランム
vyālolūka-śivājiraṁ

nala—管; veṇu—竹; śaraḥ—囲い; tanba—～で一杯の; kuśa—鋭い葉の草; kīcaka—雑草; gahvaram—洞穴; ekaḥ—一人で; eva—だけ; atiyātaḥ—通りにくい; aham—私は;

adrākṣam— 尋ねた; *vipinam*— 深い森; *mahat*— 巨大な; *ghoram*— 恐ろしい; *pratibhaya-ākāram*— 危険に; *vyāla*— 蛇; *ulūka*— フクロウ; *śiva*— ジャッカル; *ajiram*— 遊び場。

次に私は、イグサ、竹、アシ、鋭い葉の草、雑草が生い茂る森、洞穴など、一人でとおるには困難をきわめる場所を歩いていった。蛇、フクロウ、ジャッカルたちが徘徊するうっそうとした、そして不気味な森を進んでいった。

要旨解説

修行僧（パリヴラージャカーチャーリヤ・*parivrājakācārya*）には、森、丘、町や村といった神のさまざまな創造界を一人で旅をする義務があり、その目的は、神への信念と心の強さを築き、旅先の住民を神の言葉で啓発することにあります。サンニャーシーは、このような危険をかえりみることなく義務を果たさなくてはならず、現代ではその模範となるのが主チャイタンニャです。主はインド中部に広がるジャングルを旅し、そこに住む虎、熊、蛇、鹿、象といった動物たちでさえ啓発しました。現代のカリ・ユガでは、一般の人がサンニャーサ階級になることは禁じられています。ただ身なりを変えただけで自分を宣伝するだけの人間は、真のサンニャーシーとは似て非なる輩です。しかし、社会との交友関係をまったく断つ誓いをたて、主への奉仕だけに生涯を捧げることはだれにでも必要です。着るものを変えるのはたてまえにすぎません。主チャイタンニャはサンニャーシーの名前を受けいれませんでした。カリ・ユガでは、いわゆるサンニャーシーと呼ばれる人々も、主チャイタンニャの足跡に従い、自分の名前を変えるべきではありません。現代では、主の神聖な栄光について聞いて唱えるという献愛奉仕は強く勧められており、家庭生活の放棄を誓った人は、ナーラダや主チャイタンニャのようなパリヴラージャカーチャーリヤをまねる必要はなくても、聖地に行って腰を据えて修行にはげみ、ヴリンダーヴァンの6人のゴースヴァーミーのような偉大なアーチャーリヤが残した神聖な経典を、全生涯と全力をかけて繰り返しかえし聞き、そして学ばなくてはなりません。

第14節

परिश्रान्तेन्द्रियात्माहं तृप्परीतो बुभुक्षितः ।
स्नात्वा पीत्वा हृदे नद्या उपस्पृष्टो गतश्रमः ॥ १४ ॥

パリスュラーンテンドウリヤートウマーハンム
pariśrāntendriyātāmāham

トゥリトゥ・パリトー ブブクシタハ
tr̥ṭ-parīto bubhukṣitaḥ
スナートゥヴァー पीトゥヴァー フラデー ナヂャー
snātvā pītvā hrade nadyā
ウバспリシュトー ガタ・シュラマハ
upaspr̥ṣṭo gata-śramaḥ

pariśrānta—疲れて; *indriya*—肉体的に; *ātmā*—心理的に; *aham*—私は; *tr̥ṭ-parītaḥ*—喉が渴き; *bubhukṣitaḥ*—そして空腹になり; *snātvā*—沐浴する; *pītvā*—そして川の水も飲み; *hrade*—湖で; *nadyāḥ*—川の; *upaspr̥ṣṭaḥ*—～と触れることで; *gata*—～から癒された; *śramaḥ*—疲労。

なおも歩きつづけるうちに身も心も疲れ、のどがかわき、空腹を感じるようになった。私は川で体を洗い、水を飲んだ。水に触れることで、疲れは癒されていった。

要旨解説

行脚僧は、一般家庭の入り口に立って物乞いをする事なく、自然の恵みでのどのかわきや空腹感といった体の欲求を満たすことができます。ですから、世帯者の家をたずねて物乞いをするのではなく、尊い知識を与えて啓発するのがかれらの本務です。

第 1 5 節

तस्मिन्निर्मनुजेऽरण्ये पिप्पलोपस्थ आश्रितः ।
आत्मनात्मानमात्मस्थं यथाश्रुतमचिन्तयम् ॥ १५ ॥

タスミン ニルマヌジェー ラニェー
tasmin nirmanuje 'raṇye
ピッパローパスタハ アーシュリタハ
pippalopastha āśritaḥ
アトウマナートウマーナム アトウマスタナム
ātmanātmānam ātmastham
ヤタハー・シュルタンム アチンタヤナム
yathā-śrutam acintayam

tasmin—その中; *nirmanuje*—人が住んでいない; *araṇye*—森の中で; *pippala*—菩提樹;

upasthe—その下に座って; *āsritaḥ*—〜に身を寄せて; *ātmanā*—知性を使って; *ātmānam*—至高の魂; *ātma-stham*—私の内に位置して; *yathā-śrutam*—解放した魂達から聞いていたとおりに; *acintayam*—熟考した。

そのあと、人里離れた森に立つ菩提樹の木陰に座り、解放された魂たちから学んだように、知性を使って内なる至高の魂を瞑想しはじめた。

要旨解説

瞑想は好き勝手な方法でするものではありません。澄みきった媒体者である真正な精神指導者に従い、正しい情報源である経典を熟知し、訓練された知性を正しく使って全生命体の内に住む至高の魂を瞑想するのです。そうすれば、クリシュナ意識は、精神指導者の命令に従って主に愛情奉仕をしている献愛者の内に確実に育まれます。シュリー・ナーラダ・ムニは誠実な精神指導者とふれあう機会にめぐまれ、かれらに心こめて仕え、正しく啓発されました。こうしてかれは瞑想をはじめたのでした。

第16節

ध्यायतश्चरणाम्भोजं भावनिर्जितचेतसा ।
औत्कण्ठ्याश्रुकलाक्षस्य हृद्यासीन्मे शनैर्हरिः ॥ १६ ॥

デヤーヤタシュ チャラナーンボホージャナム
dhyāyataś caraṇāmbhojaṁ

バハーヴァ・ニルジタ・チェータサー
bhāva-nirjita-cetasā

アウトウカンチャーシュル・カラークシャッシャ
autkaṇṭhyaśru-kalākṣasya

フリディ アーシーン メー シャナイル ハリヒ
hṛdy āsīn me śanair hariḥ

dhyāyataḥ—そのように瞑想して; *carāṇa-ambhojam*—局所的な人格主神の蓮華の御足; *bhāva-nirjita*—主への崇高な愛情に浸るようになった心; *cetasā*—心のすべての動き（考え、感じ、望むこと）; *autkaṇṭhya*—熱心さ; *aśru-kala*—涙が流れ落ちて; *akṣasya*—目の; *hṛdi*—心の中に; *āsīt*—現われた; *me*—私の; *śanaiḥ*—遅れることなく; *hariḥ*—人格主神。

崇高な愛情に満たされるようになった心で主の蓮華の御足を瞑想しはじめたとき、涙がとめどなくあふれ、時を移さず人格主神シュリー・クリシュナが私の心の蓮華の上に現われた。

要旨解説

この節では**bhāva** (バーヴァ) という言葉に重要な意味があります。バーヴァの境地は、主に気高い愛情をいただくようになったときに得られます。最初の段階がシュラッター (*śraddhā*) つまり至高主と結ばれる状態で、そのつながりをさらに高めるには主の純粋な献愛者と交流しなくてはなりません。3番目は、献愛奉仕のために定められた規則や原則を修練する状態です。この修練によってすべての疑いは消え、献愛奉仕を妨げる個人的な未熟さを取りのぞくことができます。

疑いや未熟さが解決されれば、超越的な物事に対する基本的な信念が築かれ、同時にその味わいもさらに深くなります。そこからさらなる魅力を感じる境地に高まり、神への無垢な愛情というバーヴァを感じる直前に辿りつきます。上記のさまざまな境地は、崇高な愛情に高められるまでに起こるさまざまな段階です。崇高な愛情に満たされると、主と離れているという思いが強くなり、その思いが8種類の法悦境地へと高まっていきます。

献愛者の目から涙があふれだすのはごく自然な兆候であり、シュリー・ナーラダ・ムニは前世で家をはなれた直後にその境地に入っていたため、主に出会うのは必然の結果であり、またそれは物質的な気持ちのない高尚な精神的感覚による鮮明な体験でした。

第17節

प्रेमातिभरनिर्भिन्नपुलकारोऽतिनिर्वृतः ।
आनन्दसम्प्लवे लीनो नापश्यमुभयं मुने ॥ १७ ॥

プレマーティバハラ・ニルビヒンナ・
premātibhara-nirbhinna-

プラカーンゴー ティニルヴリタハ
pulakāṅgo 'tinirvṛtaḥ

アーナンダ・サンブラヴェー リーノー
ānanda-samplave līno

ナーパッシャム ユバハヤム ムネー
nāpaśyam ubhayam mune

premā—愛情; atibhara—大きな; nirbhinna—特に優れた; pulaka—幸福の感情; aṅgaḥ—体の各部分; ati-nirvṛtaḥ—完全に圧倒されて; ānanda—法悦; samplave—～の海で; linaḥ—～に没頭して; na—ではない; apaśyam—見る事ができた; ubhayam—両方; mune—おお、ヴァーサデーヴァよ。

ヴァーサデーヴァよ。そのとき、えもいわれぬ幸福感に打たれていたために、私の体の各部分はそれぞれ活力に満たされていた。法悦の海に没頭していた私は、自分も主も見ることができなくなった。

要旨解説

精神的な幸福感や深い法悦心は、俗な感情とはまったく比較になりません。そのような神々しい感情を表現しつくすのはとても難しいことです。私たちは、シュリー・ナーラダ・ムニの言葉のなかにその法悦境を垣間見ることができます。体の各部分や感覚はそれぞれ特有の機能をそなえています。主に出会うと、それらすべてが主に仕えられるよう完全に目覚めます。感覚の機能は、解放の境地で主のために使われてこそ発揮されるからです。ですから、そのような超越的な法悦境では、感覚が主に仕えるために別々に活気にみなぎることがあります。ナーラダ・ムニはその状態にあったため、自分自身も主自身も見ることができなかったのです。

第18節

रूपं भगवतो यत्तन्मनः कान्तं शुचापहम् ।
अपश्यन् सहसोत्तस्थे वैचा व्यादूर्मना इव ॥ १८ ॥

ルーパンム バハガヴァトー ヤトウ タン
rūpaṁ bhagavato yat tan

マナハ・カーンタンム シュチャーパハンム
manaḥ-kāntaṁ śucāpahaṁ

アパッシャン サハソッタステヘー
apaśyan sahasottasthe

ヴァイクラヴァードウ ドウルマナー イヴァ
vaiklavyād durmanā iva

rūpaṁ—姿; bhagavataḥ—人格主神の; yat—ありのままに; tat—その; manaḥ—心の; kāntam—それが望むとおりに; śuca-apahaṁ—すべての不均衡を消し去り; apaśyan—見ず

に; *sahasā*—突然; *uttasthe*—立ち上がった; *vaiklavyāt*—混乱して; *durmanāḥ*—望ましいものを失って; *iva*—そうだったように。

主の本来のおごそかな姿は、心の願いを満たし、心の乱れをすべてたちどころに消しさってくれる。その姿を突然見うしなつた私は動揺し、立ちあがった。かけがえのないものを見失ったときのように。

要旨解説

「主は姿がない存在ではない」ということをナーラダ・ムニは体験しました。しかし、その姿は物質的な体験をとおして思い浮かべられる姿とはまったく違います。私たちは、世界にあるさまざまな姿や形を目にはしていますが、そのどれ1つとして心をほんとうに満たし、心の乱れを癒してはくれるものはありません。心を満たし、癒してくれるのは主の崇高な姿の特徴であり、その姿を一度でも見れば、ほかにどんなものを見ても満足できなくなります。物質界にある姿はどれも、見る者を満足させてはくれません。「主に姿はない」とか「主は非人格である」という表現は「主に物質的な姿はない、物質的な人物ではない」という意味です。

私たちは精神的な存在であり、主の崇高な姿と永遠な絆を持っているからこそ幾生涯を経て主の姿を求めています。物質的な楽しみしか与えてくれない別の姿では満足感を得ることはできません。ナーラダ・ムニはその姿をかいま見ることができたのですが、すぐに見えなくなったためにとまどい、またその姿を求めて突然立ちあがりました。私たちが幾生涯もかけて求めてきたものをナーラダ・ムニは得ました。その主の姿を見失ったのですから、さぞかし大きな衝撃だったことでしょう。

第19節

दिदृक्षुस्तदहं भूयः प्रणिधाय मनो हृदि ।
वीक्षमाणोऽपि नापश्यमवितृप्त इवातुरः ॥ १९ ॥

ディドウリクシュス タドウ アハンム プナーヤハ
didṛkṣus tad ahaṁ bhūyaḥ

プラーニダハーヤ マノー フリディ
praṇidhāya mano hṛdi

ヴィークシャマーノー ピ ナーパッシャナム
vikṣamāṇo 'pi nāpaśyam

アヴィトウリプタ イヴァートウラハ
avitr̥pta ivāturaḥ

didṛkṣuḥ—見たいと願って; tat—それ; aham—私は; bhūyaḥ—再び; praṇidhāya—集中させた心で; manaḥ—心; hr̥di—心に; viḥsamāṇaḥ—見るのを待っている; api—にもかかわらず; na—決して～ない; apaśyam—主を見た; avitr̥ptaḥ—満たされずに; iva—～のように; āturaḥ—悲しんだ。

その崇高な姿をもう一度見ようと瞑想を試みたが、どうしても見るができなかった。私は深い悲しみに沈んだ。

要旨解説

主の姿を見るための自分勝手な方法はありません。すべては主のいわれのない慈悲にかかっています。どうか私のまえに現われてください、と主に要求することはできません。こちらの都合どおりに太陽に昇るよう要求できないのと同じです。太陽が自然の法則どおりに昇るように、主もいわれのない慈悲の心から現われてくださいます。主に仕えながら、その瞬間が訪れるのを忍耐強く待ちつづけなくてはなりません。ナーラダ・ムニは、最初は見ることができた方法をまた機械的に繰り返そうとしたのですが、いくら努力しても同じ方法は成功しませんでした。主は恩義に縛られる方ではありません。主を縛ることができるのは、純粋無垢な献愛奉仕だけです。そして物質的な感覚では、見ることも感じることもできません。主の慈悲にすがっておこなう献愛奉仕に主が喜びを感じたとき、主は自分の判断で姿を見せます。

第20節

एवं यतन्तं विजने मामाहागोचरो गिराम् ।
गम्भीरश्लक्ष्णया वाचा शुचः प्रशमयन्निव ॥ २० ॥

エーヴァンム ヤタンタンム ヴィジャネー
evam yatantam vijane

マーンム アーハーゴーチャロー ギラーンム
mām āhāgocaro girām

ガンビヒーラ・シュラクシュナヤー ヴァーチャー
gambhīra-ślakṣṇayā vācā

シュチャハ プラシャマヤン イヴァ
śucaḥ praśamayann iva

evam—そのように; yatantam—試みている者; vijane—だれもない場所で; mām—私に; āha—言った; agocaraḥ—物理的音の範囲を超えた; girām—発生音; gambhira—威厳のある; ślakṣṇayā—耳に心地よい; vācā—言葉; śucaḥ—悲しみ; praśamayan—和らげている; iva—のような。

だれもないその場所で何度も繰り返している私を見て、俗な説明では語りつくせない人格主神は、私の悲しみをやわらげようと、荘厳で心地よい言葉で私に語りかけた。

要旨解説

ヴェーダでは、神は「俗な言葉や知性では辿りつけない方」と描写されています。それでも、いわれなき慈悲が授かれれば、主の言葉を聞いたり主に語りかけたりできる感覚を授かることができます。これが主の人智のおよばない力です。主の慈悲が注がれる人物だけが、主の言葉を聞くことができます。主はナーラダ・ムニにとても満足し、主の言葉を聞くことができる力を授けました。しかし、献愛奉仕をはじめたばかりの人が主と直接ふれあうことはできません。ナーラダへは特別の贈り物として授けられました。主の妙なる言葉を聞き、主と離れている悲しみは幾分やわげられました。神に親愛の情をいただいている献愛者は別れの気持ちで悲しんでいるのですが、その思いゆえに、いつも超越的な法悦感に包まれています。

第21節

हन्तास्मिञ्जन्मनि भवान्मा मां द्रष्टुमिहार्हति ।
अविपक्वकषायाणां दुर्दर्शोऽहं कुयोगिनाम् ॥ २१ ॥

ハンタースミン ジャンマニ バハヴァーン
hantāsmiñ janmani bhavān

マー マーンム ドウラシュトゥンム イハールハティ
mā mām draṣṭum ihārhati

アヴィパクヴァ・カシャーヤーナーンム
avipakva-kaṣāyāṇām

ドウルダルショー ハンム クヨーギナーンム
durdarśo 'ham kuyoginām

hanta—おお、ナーラダよ; asmin—この; janmani—生涯; bhavān—お前は; mā—ではない; mām—私を; draṣṭum—見ること; iha—ここで; arhati—にふさわしい; avipakva—未熟

な; *kaṣāyāṇām*—物質的な汚れ; *durdarśaḥ*—見ることが難しい; *aham*—私; *kuyoginām*—不完全な奉仕。

主はこう語られた。「おお、ナーラダ。おまえがこの生涯でわたしを見ることができないことを残念に思う。奉仕が不完全な者、物質的な穢れを洗い流していない者は、わたしを見ることはほとんどできない。」

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』は、人格主神を「もっとも純粋な方・至高の絶対真理者」と表現しています。主の内に物質的な様相はありませんから、ほんの少しでも物質的な望みを持つ人は主に近づくことはできません。献愛奉仕は、少なくとも2種類の物質の様式、すなわち激性と無知のない状態からはじまります。その結果として、カーマ (*kāma*・欲情) とローバ (*lobha*・強欲) から解放された兆候が表われます。これは、感覚満足への望みと貪欲さから自由でなければならない、ということです。徳性は自然の様式のなかでも安定しているのですが、物質の状態から完全に自由になるためには、徳性さえも超えなくてはなりません。人里離れた場所で神との出会いを求めるのは徳性です。精神的完成を求めて森に入っても、それで主に会えるとはかぎりません。物質的な執着心をすべて捨てて超越的境地にいることだけが、献愛者にとって人格主神とじかに出会える助けになります。もっとも素晴らしい方法は、主の崇高な姿が礼拝されている場所に住むことです。主の寺院は神聖な場所、そして森は住むのに適した場所です。初心の献愛者には、主を探しに森に入るよりも、主の神像 (*arcanā*・アルチャナー) を崇拝することが勧められています。献愛奉仕はアルチャナーから始まるものであり、それは森に行くよりも優れた方法です。シュリー・ナーラダ・ムニは現世で物欲をすべて捨てさった境地にあり、自らの存在をとおしてどこでもヴァイクンタに変えられるのですが、森に入ることはしません。人類、神々、キンナラ、ガンダルヴァ、リシ、ムニ、その他すべての人々を主の献愛者に変貌させるために、星から星へと旅をつづけています。かれの言動をとおして、プラフラーダ・マハーラージャ、ドウルヴァ・マハーラージャなど、多くの献愛者が主の崇高な奉仕を始めました。ですから、主の純粋な献愛者は、ナーラダやプラフラーダのような偉大な献愛者の足跡に従い、自分の時間をすべてキールタンという主を讃える方法に使っています。そのような布教方法はすべての俗な質を超越しています。

第22節

सकृद्यद् दर्शितं रूपमेतत्कामाय तेऽनघ ।
मत्कामः शनकैः साधु सर्वान्मुञ्चति हृच्छयान् ॥ २२ ॥

サクリドウ ヤドウ ダルシタンム ルーパンム
sakṛd yad darśitam rūpam

エータトウ カーマーヤ テー ナガハ
etat kāmāya te 'nagha

マトウ・カーマハ シャナカイヒ サードフウ
mat-kāmaḥ śanakaiḥ sādhu

サルヴァーン ムンチャティ フリッチャヤーン
sarvān muñcati hṛc-chayān

sakṛt—1度だけ; *yat*—それ; *darśitam*—示された; *rūpam*—姿; *etat*—これがそうである; *kāmāya*—求めている; *te*—お前の; *anagha*—おお、徳高き者よ; *mat*—私のもの; *kāmaḥ*—望み; *śanakaiḥ*—高めることで; *sādhuḥ*—献愛者; *sarvān*—すべて; *muñcati*—失う; *hṛt-śayān*—物質的な望み。

おお、徳高き者よ。おまえはわたしを1度だけ見ることができた。わたしを求める望みを強くさせるためだった。わたしを求めるほどに、物質的望みをすべて捨てるようになるからである。

要旨解説

生命体の心から望みがなくなることはありません。命のないただの石ころではないからです。必ず動き、考え、感じ、そして望んでいます。しかしその考え・感情・希望が物質的であれば束縛されますし、逆に主への奉仕のために考え、感じ、望むのであればあらゆる束縛から徐々に自由になっていきます。主に崇高な奉仕をすればするほど、さらに奉仕をする気持ちが強くなっていきます。それが神聖な奉仕の特質です。物質的奉仕はいつか飽きるものですが、精神的奉仕は飽きることも終わることもありません。主への崇高な愛情奉仕を高めようと望みつづけることができますし、なおかつ飽きも終わりもありません。情熱をこめて主に仕えることで、主の存在を超越的に感じるすることができます。つまり主に会うということは（主への奉仕と主自身は同じですから）主に仕えることも言えます。真剣な献愛者は主に真剣に仕えながら前進しなくてはなりません。主はそういう献愛者を正しく導き、どうやって、どこでおこなうべき

かを教えてください。ナーラダは物質的な望みを持っていたわけではありませんでしたが、それでも主は、かれが自分をより強く求めるよう助言したのです。

第23節

सत्सेवयादीर्घयापि जाता मयि दृढा मतिः ।
हित्वावद्यमिमं लोकं गन्ता मञ्जनतामसि ॥ २३ ॥

サトウ・セヴァヤーディールガハヤーピ
sat-sevayādirghayāpi

ジャーター マイ ドウリダハー マティヒ
jātā mayi dṛḍhā matiḥ

ヒトウヴァーヴァデヤム イマンム ローカンム
hitvāvadyam imam lokam

ガンター マジ・ジャナターンム アシ
gantā maj-janatām asi

sat-sevayā—絶対真理者への奉仕によって; *adirghayā*—数日間; *api*—でさえ; *jātā*—到達して; *mayi*—私に; *dṛḍhā*—堅い; *matiḥ*—知性; *hitvā*—捨て去って; *avadyam*—みじめな; *imam*—この; *lokam*—物質界; *gantā*—～に行くこと; *mat-janatām*—私の仲間（家族の一員）; *asi*—～になる。

絶対真理者に仕えれば、それがたとえ数日間であっても、献愛者はわたしに対する堅固で不動の知性を築きあげる。その結果、この無常な物質界を捨て、超越的世界でわたしの家族の一員になるために生きつづけるようになる。

要旨解説

絶対真理者に仕える、とは、主と初心の献愛者の間にいる透明な媒体である正しい精神指導者に導かれて絶対人格主神に仕える、ということです。初心の献愛者は、感覚の力が不完全で主に近づくことができないため、精神指導者に導かれて主に仕える訓練を受けなくてはなりません。その訓練がたとえ数日間だとしても、初心の献愛者はその奉仕をとおして知性を授かり、その知性によって、物質界に住みつづけるという束縛から抜けだし、精神界に高められて主の解放された仲間の一人になることができます。

第24節

मतिर्मयि निबद्धेयं न विपद्येत कर्हिचित् ।
प्रजासर्गनिरोधेषि स्मृतिश्च मदनुग्रहात् ॥ २४ ॥

マティル マイ ニバツデヘーヤンム
matir mayi nibaddheyam

ナ ヴィパデュータ カルヒチトウ
na vipadyeta karhicit

ブラジャー・サルガ・ニローデヘー ピ
prajā-sarga-nirodhe 'pi

スMRIティシユ チャ マドウ・アヌグラハートウ
smṛtiś ca mad-anugrahāt

matih—知性; *mayi*—私に身を委ねた; *nibaddhā*—従事して; *iyam*—この; *na*—決して～ない; *vipadyeta*—離れて; *karhicit*—どのような時でも; *prajā*—生命体; *sarga*—創造の時; *nirodhe*—また破壊の時; *api*—～でさえ; *smṛtiḥ*—記憶; *ca*—そして; *mat*—私のもの; *anugrahāt*—～の慈悲で。

わたしへの奉仕に使われている知性は、どのようなときでも妨げられない。世界が創造されるときでさえも、あるいは破壊されるときでも、おまえの記憶はわたしの慈悲によって永続する。

要旨解説

人格主神に捧げる奉仕は、決して徒勞に終わることはありません。主は永遠ですから、主のために使う知性や主のためにする活動も永遠です。『バガヴァッド・ギーター』では、主のためにする超越的な奉仕は幾生涯ものあいだたくわえられ、奉仕をした献愛者が十分に円熟したときには、積み重ねられた奉仕のおかげで、主との交流の仲間入りを許される、と言われています。神への奉仕の蓄積は決してなくなり、完全に円熟するまで高まりつづけるのです。

第25節

एतावदुक्तोपरराम तन्महद्
भूतं नभोक्तिरामक्तिरामीश्वरम् ।

अहं च तस्मै महतां महीयसे
शीर्ष्णाविनामं विदधेऽनुकम्पितः ॥ २५ ॥

エーターヴァドゥ ウクトव्ओーपारारामा तान् माहदु
etāvad uktvopararāma tan mahad

ブフータンム ナボホー・リンガンム アリンガンム イーシュヴァランム
bhūtaṁ nabho-liṅgam aliṅgam īśvaram

アハンム チャ タスマイ マハターンム マヒーヤセー
aham ca tasmai mahatām mahīyase

シールシュナーヴァナーमानム ヴィダデヘー नुकांपिताह
śīrṣṇāvanāmaṁ vidadhe 'nukampitaḥ

etāvat—そのように; *uktvā*—語って; *upararāma*—やめた; *tat*—その; *mahat*—偉大な; *bhūtam*—素晴らしい; *nabhaḥ-liṅgam*—音の権化; *aliṅgam*—目では見られない; *īśvaram*—至高の権威者; *aham*—私; *ca*—もまた; *tasmai*—主に; *mahatām*—偉大な方; *mahīyase*—讃えられた人物に; *śīrṣṇā*—頭で; *avanāmam*—お辞儀; *vidadhe*—実行されて; *anukampitaḥ*—主に恩寵を授かって。

やがて、耳には聞こえても目には見えない存在として、なおかつもっとも素晴らしい人物として私に語りかけた至高の権威者は、そこで話しをやめた。私は感謝の念に打たれ、頭をさげて主にお辞儀をした。

要旨解説

人格主神は目に見えず、しかし聞くことができる——この表現に矛盾はありません。主は4つのヴェーダを呼吸で創造し、そして私たちはその主をヴェーダという超越的な音をとおして見、そして悟ることができます。同じように、『バガヴァッド・ギーター』は主の音の権化であり、その両方に違いはありません。結論として、超越的な音を忍耐強く唱えることで主を見ることも聞くこともできる、ということが言えます。

第26節

नामान्यनन्तस्य हतत्रपः पठन्

गुह्यानि भद्राणि कृतानि च स्मरन् ।

गां पर्यटंस्तुष्टमना गतस्पृहः

कालं प्रतीक्षन् विमदो विमत्सरः ॥ २६ ॥३

ナーマーニ アナンタッシャ ハタ・トゥラパハ パタハン
nāmāny anantasya hata-trapaḥ paṭhan

グヒヤーニ バハドゥラーニ クリターニ チャ スマラン
guhyāni bhadrāṇi kṛtāni ca smaran

ガーンム パリヤタンムス トウシュタ・マナー ガタ・スプリハハ
gām paryātaṁs tuṣṭa-manā gata-spr̥haḥ

カーランム プラティークシャン ヴィマドー ヴィマトウサラハ
kālaṁ pratikṣan vimado vimatsaraḥ

nāmāni—聖なる名前、名声など; *anantasya*—無限なる者の; *hata-trapaḥ*—物質界のすべての形式と無縁で; *paṭhan*—繰り返し読むことなどで; *guhyāni*—不可思議な; *bhadrāṇi*—あらゆる祝福; *kṛtāni*—活動; *ca*—そして; *smaran*—つねに思い出している; *gām*—地上で; *paryātan*—あらゆる場所を旅している; *tuṣṭa-manāḥ*—完全に満足して; *gata-spr̥haḥ*—すべての物質的望みから離れて; *kālam*—時; *pratikṣan*—待っている; *vimadaḥ*—自慢することなく; *vimatsaraḥ*—妬むことなく。

こうして私は、物質界の形式にいっさい囚われることなく主の神聖な名前と名声を繰り返して唱えはじめた。主の崇高な娯楽について唱えたり思いつづけたりする行為は、祝福に満ちている。完全に満たされ心で、謙虚で、だれをも妬むことなく、私は主を思い、主の名を唱えながら地上をくまなく旅した。

要旨解説

この章では、主の誠実な献愛者の生涯について、ナーラダ・ムニの実例をとおして概説されています。そのような献愛者は、主または主の真実の代表者から入門を受けたあと、主の栄光の唱名を厳粛に受けとめ、ほかの人たちも主の栄光について聞けるように世界中を旅します。欲得ずくではありません。たった一つの望み——神の元に帰る——という目標を目指しているのです。この結果は、肉体を捨てるという終着点で満たされます。神の元に帰るといふ気高い目標がありますから、だれも妬むことはないし、自分が神の元に帰っていけることを自慢もしません。唯一の仕事は、主の聖なる名前、名声、娯楽を唱えて思いだすことだけ。そして、持てる能力のかぎりをつくし、損得を考慮することなくこの教えを人々の幸せのために分け与えています。

第 27 節

एवं कृष्णमतेर्ब्रह्मज्ञासक्तस्यामलात्मनः ।
कालः प्रादुरभूत्काले तडित्सौदामनी यथा ॥ २७ ॥

エーヴァンム クリシュナ・マテール プラフマン
evam kṛṣṇa-mater brahman

ナーサクタツシャーマラトウマナハ
nāsaktasyāmalātmanaḥ

カーラハ プラドゥラブフトウ カレー
kālah prādurabhūt kale

タディトゥ サウダーマニー ヤタハー
taḍit saudāmanī yathā

evam—このように; *kṛṣṇa-mateḥ*—クリシュナの思いに没頭している人物; *brahman*—お
お、ヴァーサデーヴァよ; *na*—ではない; *āsaktasya*—執着している者の; *amala-ātmanaḥ*—
あらゆる物質的汚れのない者の; *kālah*—死; *prādurabhūt*—見えるようになる; *kāle*—時の流
れとともに; *taḍit*—稲妻; *saudāmanī*—光っている; *yathā*—～のように。

ブラーフマナ・ヴァーサデーヴァよ。主クリシュナへの思いに没頭し、物質に穢されていな
いために執着心のなかった私は、やがて死と向かいあった。稲妻と稲光が同時に起こるように。

要旨解説

心をクリシュナのことに没頭させる、とは、物質のよごれや物欲を心から洗い流す、という
意味です。裕福な人が安っぽいものに関心をしめさないように、永遠な暮らし・完全な認識・
至福がある神の国にまちがいなく帰っていける主クリシュナの献愛者も、永遠の価値のない人
形や真実の影にすぎない俗事には関心がありません。それが精神的に豊かな人物の証しです。
そしてやがて、純粋な献愛者の準備がすっかり整ったとき、通常「死」と呼ばれている肉体の
変化が突然起こります。純粋な献愛者にとって、そのような変化はまさに稲妻のように起こり、
そして同時に稲光も発生します。それが、至高者の意志によって起こる献愛者の肉体と精神的
な体を瞬時に入れかえる説明です。純粋な献愛者は、死ぬまえにすでに物質的な想念を捨てて
います。火と接触した鉄が赤熱状態に変化するよう、体が精神的になっているからです。

第 28 節

प्रयुज्यमाने मयि तां शुद्धां भागवतीं तनुम् ।
आरब्धकर्मनिर्वाणो न्यपतत् पाञ्चभौतिकः ॥ २८ ॥

プラユヅジャマーネー マイ ターンム
prayujyamāne mayi tām

シュッダハーンム バハーガヴァティーンム タヌム
śuddhām bhāgavatīm tanum

アーラブダハ・カルマ・ニルヴァーノ
ārabdha-karma-nirvāṇo

ニヤパタトウ パーンチャ・バハウティカハ
nyapatat pāñca-bhautikaḥ

prayujyamāne—授けられて; *mayi*—私に; *tām*—その; *śuddhām*—超越的な; *bhāgavatīm*—人格主神との交流にふさわしい; *tanum*—体; *ārabdha*—得て; *karma*—果報的活動; *nirvāṇaḥ*—禁止された; *nyapatat*—放棄する; *pāñca-bhautikaḥ*—5つの物質要素で構成された体。

人格主神との交流にふさわしい神聖な体を授かった私は、5種類の物質要素でできた肉体を捨て、こうして過去の活動（カルマ）によって生じた物質的な反動はすべて停止した。

要旨解説

主との交流にふさわしい神聖な体を与えられると主に告げられたとおり、ナーラダは肉体を捨てたあとに精神的な体を授かりました。この体には物質的な要素はなく、永遠で、物質の様式とは無縁で、果報的活動の反動がない、という3種類の超越的質がそなわっています。物質の肉体はこの3つの質がないために苦しみしかありません。献愛者の体は、主に献愛奉仕をすることですぐに崇高な質に包まれます。崇高な献愛奉仕の影響は、試金石が鉄に対して起こす磁石の力のような機能に似ています。ですから、肉体を変えることは、純粋な献愛者に及ぼす物質自然の3つの性質が停止する、ということを目指しています。経典にはこの実例をしめす出来事がたくさんあります。ドウルヴァ・マハーラージャやプラフラーダ・マハーラージャ、その他多くの献愛者が、見た目には以前の体と変わらない体で人格主神と出会っています。これは、献愛者の体が物質的体から超越的体に変化することを表わしています。それが、権威ある経典にもとづいたゴースヴァーミーたちの見解です。『ブラフマ・サムヒター』は、インドラ・

ゴーパ (indra-gopa) という細菌から天上の王である偉大なインドラまで、すべての生命体はカルマの法則に拘束され、自らの活動で生じる苦楽に縛られている、と述べています。献愛者だけがその反動に縛られていません。それは至高の権威者である人格主神のいわれなき慈悲によるものです。

第 29 節

कल्पान्त इदमादाय शयानेऽम्भस्युदन्वतः ।
शिशयिषोरनुप्राणं विविशेऽन्तरहं विभोः ॥ २९ ॥

カルバーンタ イダンム アーダーヤ
kalpānta idam ādāya

シャヤーネー ンバハッシ ウダンヴァタハ
śayāne 'mbhasy udanvataḥ

シシャイショール アヌプラーナム
śīśayiṣor anuprāṇam

ヴィヴィシェー ンタル アハンム ヴィボホーホ
viviśe 'ntar aham vibhoḥ

kalpa-ante—ブラフマーの1日の終わりに; idam—この; ādāya—~を伴って; śayāne—横たわるために入る; ambhasi—原因の海で; udanvataḥ—荒廃; śīśayiṣoḥ—人格主神(ナーラーヤナ)が横たわっている; anuprāṇam—呼吸; viviśe—~に入った; antaḥ—~の中; aham—私; vibhoḥ—主ブラフマーの。

宇宙の創造期の終わりに、人格主神・主ナーラーヤナが破壊の海に横たわるとき、ブラフマーは、創造に必要な要素をすべて伴って主のなかに入りはじめ、私も主の呼吸をとおって入っていった。

要旨解説

ナーラダはブラフマーの子として知られていますが、それは主クリシュナがヴァスデーヴァの子として知られているのと同じです。人格主神、そしてナーラダのような解放した献愛者は、同じ過程をとおして物質界に現われます。『バガヴァッド・ギーター』で述べられているように、主の誕生と活動はすべて超越的です。ですから、権威ある意見に照らして見ると、ナーラダがブラフマーの子として誕生することも聖なる娯楽です。その降誕と消滅は、主とほぼ同じ

境地でおこなわれます。つまり、主と献愛者は、精神的生命体として「同時に同じで違う」と言えます。両者とも同じ崇高な境地にいるのです。

第30節

सहस्रयुगपर्यन्ते उत्थायेदं सिसृक्षतः ।
मरीचिमिश्रा ऋषयः प्राणेभ्योऽहं च जज्ञिरे ॥ ३० ॥

サハスラ・ユガ・パリヤンテ
sahasra-yuga-paryante

ウッタハーイェーダナム シスリクシャタハ
utthāyedaṁ sisṛkṣataḥ

マリーチ・ミシュラー リシャヤハ
marīci-miśrā ṛṣayah

ブラーネービョー ハナム チャ ジャギレー
prāṇebhyo 'haṁ ca jajñire

sahasra—1,000; *yuga*—430万年; *paryante*—その期間の終わりに; *utthāya*—満了して; *idam*—この; *sisṛkṣataḥ*—再び創造することを願った; *marīci-miśrāḥ*—マリーチのようなりシ達; *ṛṣayah*—すべてのリシ; *prāṇebhyaḥ*—主の諸感覚から; *aham*—私; *ca*—もまた; *jajñire*—現われた。

43億年（太陽年）が終わり、ブラフマーが主の意志に従ってふたたび創造するために目覚めるとき、主の超越的体からマリーチ、アンギラー、アトゥリを筆頭とするリシたちがすべて創造され、私もかれらとともに現われた。

要旨解説

ブラフマーの1日は43億（太陽）年です。これは『バガヴァッド・ギーター』でも記述されています。つまり、この期間にブラフマジーは、ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌ（ブラフマーの創造者）の体内でヨーガ・ニドラー (*yoga-nidrā*) の状態で休んでいます。主の意志によってブラフマーという媒体者をとおしてふたたび世界が創造されるとき、ブラフマーが休眠期間から覚め、主の崇高な体の各部分から偉大なりシたちが全員現われ、そのなかにナーラダも含まれています。これは、ナーラダが同じ崇高な体として現われるということを示しています。シュリー・ナーラダは、全能の主が作りだした超越・物質の世界をどこでも、いつまで

も自由に移動できます。条件づけられた魂が持つ肉体とは違い、肉体と魂という区別のない精神的体で出現し、そして消えることができるのです。

第31節

अन्तर्बहिश्च लोकांस्त्रीन् पर्येभ्यस्कन्दितव्रतः ।
अनुग्रहान्महाविष्णोरविघातगतिः क्वचित् ॥ ३१ ॥

アンタル バヒシュ チャ ローカーンムス トウリー
antar bahiś ca lokāms trīn

パリエーミ アスカンディタ・ヴラタハ
paryemy askandita-vrataḥ

アヌグラハーン マハー・ヴィシュノール
anugrahān mahā-viṣṇor

アヴィガハータ・ガティヒ クヴァチトゥ
avighāta-gatiḥ kvacit

antaḥ—超越界で; *bahiḥ*—物質界で; *ca*—そして; *lokān*—惑星; *trīn*—3 (区分); *paryemi*—旅する; *askandita*—途切れない; *vrataḥ*—誓い; *anugrahāt*—いわれのない慈悲によって; *mahā-viṣṇoḥ*—マハー・ヴィシュヌ (カーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌ) の; *avighāta*—制限されることなく; *gatiḥ*—入ること; *kvacit*—どのようなときでも。

それ以来、全能のヴィシュヌの恩寵によって、私は精神界であろうと、物質の三界であろうと、制約をいっさい受けずに旅している。これは、私が主に絶え間ない献愛奉仕をしているからである。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で言われているように、物質界には3つの領域があり、それぞれウールドゥヴァ・ローカ (*ūrdhva-loka*・頂点の惑星)、マデヤ・ローカ (*madhya-loka*・中位の惑星)、アドー・ローカ (*adho-loka*・下位の惑星) と呼ばれています。ウールドゥヴァ・ローカ、つまりブラフマローカの上には、宇宙の物質要素の覆いがあり、その領域を超えたところに果てしなく広がる精神界があります。精神界には自ら光り輝く無限のヴァイクンタ惑星が広がり、そこには神自らが、永遠に解放されている生命体たちと住んでいます。シュリー・ナーラダ・ムニは、このような精神界・物質界どちらの世界にも自由に行き来でき、主が

自らの創造界を自由に移動する様に似ています。物質界にいる生命体は、徳性・激性・無知という自然の三様式の影響を受けています。しかしシュリー・ナーラダ・ムニは物質界の三様式を超えているため、どこにでも自由に行くことができます。解放された宇宙飛行士とも言うべき人物なのです。主ヴィシュヌのいわれなき慈悲はすばらしく、その慈悲は主の恩寵によって献愛者だけが感じることができます。ですから、献愛者はぜったいに道から逸れませんが、結果だけに囚われる物質主義者や推論に頼る哲学者は、自然の様式に操られているために道を踏みはずします。先に述べたリシたちは、ナーラダのように崇高な世界に入ることはできません。この事実については『ナラシンハ・プラーナ』で言及されています。マリーチを筆頭とするリシたちは果報的活動の権威者ですが、サナカ、サナータナを代表するリシたちは推論哲学の権威者です。しかし、シュリー・ナーラダ・ムニは主への超越的な献愛奉仕の筆頭の権威者です。主の献愛奉仕にかかわるすべての偉大な権威者は、『ナーラダ・バクティ・スートラ』で述べられているナーラダ・ムニの足跡に従っていますから、主の献愛者はだれでも、神の国・ヴァイクンタに入る資格をそなえています。

第32節

देवदत्तामिमां वीणां स्वरब्रह्मविभूषिताम् ।
मूर्च्छयित्वा हरिकथां गायमानश्चराम्यहम् ॥ ३२ ॥

デーヴァ・ダッターナム イマーンム ヴィーナーナム
deva-dattām imāṁ vīṇāṁ

スヴァーラ・ブラフマ・ヴィブフーシターナム
svara-brahma-vibhūṣitām

ムールツチャイトウヴァー ハリ・カタハーンム
mūrcchayitvā hari-kathām

ガーヤマーナシュ チャラーミ アハンム
gāyamānaś carāmy aham

deva—至高人格主神(シュリー・クリシュナ); *dattām*—に恵まれて; *imām*—この; *vīṇām*—弦楽器; *svara*—歌っている; *brahma*—崇高な; *vibhūṣitām*—〜で飾られて; *mūrcchayitvā*—奏でている; *hari-kathām*—崇高な言葉; *gāyamānaḥ*—いつも歌っている; *carāmi*—動く; *aham*—私。

こうして私は、主クリシュナから授かったこのヴィーナーという荘厳な音を奏でる楽器を手に、主の崇高な栄光を歌って旅しつづけている。

要旨解説

主シュリー・クリシュナからナーラダに渡されたこのヴィーナーという楽器については、『リ
ンガ・プラーナ』に記述があり、シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーも確証しています。
この神々しい楽器は超越的質をそなえており、主シュリー・クリシュナとナーラダと同じ存在
です。この楽器から奏でられる音が物質的であるはずがありません。ですから、ナーラダの楽
器をとおして広められた主の栄光と娯楽も超越的であり、俗な質はいっさいありません。七音
階、すなわちシャ・śa (śaḍja・シャドゥジャ)、リ・ṛ (ṛṣabha・リシャバ)、ガー・gā (gāndhāra・
ガンダーラ)、マー・ma (madhyama・マデヤマ)、パ・pa (pañcama・パンチャマ)、ダハ・
dha (dhaiyata・ダイヴァタ)、ニ・ni (niśāda・ニシャダ) も神聖な音であり、特に神聖な歌
のために使われています。シュリー・ナーラダデーヴァは主の純粋な献愛者であり、この楽器
を授けた主への返礼として、いつも仕えながら主の崇高な栄光を歌っていますから、その気高
い地位にふさわしい確固たる人物でありつづけます。物質界にいながらにして自己を悟った魂
は、『バガヴァッド・ギーター』が確証しているように、シュリーラ・ナーラダ・ムニの足跡
に従いながら、シャ・リ・ガー・マーなどの七音階を使って、主の栄光をいつも歌いながら主
に仕えなくてはなりません。

第33節

प्रगायतः स्ववीर्याणि तीर्थपादः प्रियश्रवाः ।
आहूत इव मे शीघ्रं दर्शनं याति चेतसि ॥ ३३ ॥

プラガーヤタハ スヴァ・ヴィーリヤーニ
pragāyataḥ sva-vīryāṇi

ティールタハ・パーダハ プリヤ・シュラヴァーハ
tīrtha-pādaḥ priya-śravāḥ

アフータ イヴァ メー シーグフラム
āhūta iva me śīghram

ダルシャナンム ヤーティ チェータシ
darśanam yāti cetasi

pragāyataḥ—そのように歌いながら; sva-vīryāṇi—自分の活動; tīrtha-pādaḥ—すべての
美德と神聖さの源である蓮華の御足を持つ主; priya-śravāḥ—耳に快い; āhūtaḥ—呼び求めて;
iva—~のように; me—私に; śīghram—まもなく; darśanam—見ること; yāti—現われる;
cetasi—心の座に。

至高主・主シュリー・クリシュナの栄光と活動は、聞く者の耳に快くひびく。その至高主は、私が至高主の神聖な活動について唱えた瞬間、あたかも私の呼び声に応えられたかのように、私の心の座にたちまち出現された。

要旨解説

絶対的な人格主神は、その崇高な名前・姿・娯楽、これらにまつわる音や言葉となんら変わりません。心の清い献愛者は、主の名前・名声・活動について聞き、唱える純粋な奉仕によってすぐに主を見ることができます。精神的な受信機をとおして心の鏡に主の姿が映しだされるのです。ですから、愛情をこめた奉仕で主と結ばれている純粋な献愛者は、毎瞬間主の存在を実感しています。だれかが自分を讃えているのを聞いて楽しむという気持ちは、だれにでも共通しています。それは自然な本能であり、主も、ふつうの生命体と同じ個性を持っていますから、この心理も持ちあわせています。なぜなら、個々の魂に見られる心理的特徴は、絶対的な主が持つ同じ心理の表われだからです。唯一異なるのは、主はすべての魂の頂点にあり、為すことすべてが絶対的だという点です。ですから、純粋な献愛者が主を称讃し、主がその言葉に魅了されても、それは特に驚くことではありません。主は絶対的な方ですから、主を讃える絵に現われることもでき、その絵も主も同じ存在です。シュリーラ・ナーラダは主の栄光を自分のために唱えているわけではなく、その称讃が主と同じものだからこそ讃えています。ナーラダ・ムニは、超越的な唱名をとおして主と直接かかわることのできる人物なのです。

第34節

एतद्भ्यातुरचित्तानां मात्रास्पर्शच्छया मुहुः ।
भवसिन्धुप्लवो दृष्टो हरिचर्यानुवर्णनम् ॥ ३४ ॥

エータドゥ デヒイ アートウラ・チッターナナム
etad dhy ātura-cittānām

マートウラー・スパルシェッチャヤー ムフフ
mātrā-sparśecchayā muhuḥ

バハヴァ・シンドフウ・プラヴォー ドウリシュト
bhava-sindhu-plavo dṛṣṭo

ハリ・チャリヤーヌヴァルナナム
hari-caryānuvarṇanam

etat—この; hi—確かに; ātura-cittānām—心が心配や悩みでつねに満ちている人々の; mātrā—感覚の楽しみの対象物; sparsā—諸感覚; icchayā—望みによって; muhuḥ—いつも; bhava-sindhu—無知の海; plavaḥ—船; dṛṣṭaḥ—経験した; hari-carya—ハリ、人格主神の活動; anuvarṇanam—絶えまない吟唱。

快樂を求めているために不安や悩みにいつも苦しめられている人々は、無知の海を渡るにもっともふさわしい船、すなわち人格主神の超越的な活動の唱名という船に乗らなくてはならない——私はこのことを自ら体験した。

要旨解説

生命体はほんの一瞬でもじっとしてはいられません。なにかをし、なにかを考え、なにかについて話しているはずです。ふつう、物質中心の人は、自分の感覚を満たしてくれることについて考えたり話しあったりします。しかし、感覚の衝動から生じる行動は外的な幻想の力に操られているため、心から満たされることはありません。逆に、心配と不安にさいなまれるばかりです。これがマヤー、すなわち「そうではないもの」の正体です。ほんとうに満足させてはくれないものが、満足の対象として受けいれられているのです。ですからナーラダ・ムニは自分の体験に照らして、「感覚満足を求めているのに満足できない人は、主がしたことをいつも語っていれば満足できる」と言っています。話し合う内容を変えさえすればいいのです。何も考えない、あるいは感じたり、望んだり、働いたりもしなくなる、ということはだれにもできません。しかしほんとうの幸せをつかむには、話す対象を変えなくてはなりません。やがては死にゆく政治家の政策を論じるよりも、主自身が見せた政治的手腕について話してください。映画スターについて駄弁を弄するよりも、主の永遠の親交者であるゴーピーやラクシュミーと主が楽しんだことについて話しあってください。全能の人格主神は、いわれなき慈悲の心から地上に降誕し、見た目はふつうの人間とほとんど変わらない、それでいて並外れた行動を見せましたが、それは主が全能だからこそできたことです。条件づけられた魂が超越的な世界に目を向けるように、またかれらを幸せにするためにしたことです。その結果、やがて崇高な境地に高められ、すべての苦しみの源である無知の海をたやすく渡りきることができます。これは、シュリー・ナーラダ・ムニのような権威者が自分の経験をもとにして語っている教えです。そして、私たちも同じ体験をすることができます、主のもっとも親しい偉大な聖者の足跡に従いさえすれば。

第35節

यमादिभिर्योगपथैः कामलोभहतो मुहुः ।
मुकुन्दसेवया यद्वत्तथात्माद्वा न शाम्यति ॥ ३५ ॥

ヤマーディビヒル ヨーガ・パタハイヒ
yamādibhir yoga-pathaiḥ

カーマ・ローバハ・ハトー ムフフ
kāma-lobha-hato muhuḥ

ムクンダ・セーヴァヤー ヤドゥヴァトウ
mukunda-sevayā yadvat

タタハートウマーツダハー ナ シャーミヤティ
tathātmāddhā na śāmyati

yama-ādibhiḥ—自己抑制を修練する方法によって; *yoga-pathaiḥ*—ヨーガのシステム（神聖な境地に到達するための神秘的な肉体の力）によって; *kāma*—感覚満足への望み; *lobha*—感覚の満足に対する欲望; *hataḥ*—抑制された; *muhuḥ*—いつも; *mukunda*—人格主神; *sevayā*—～への奉仕によって; *yadvat*—ありのままに; *tathā*—そのように; *ātmā*—魂; *addhā*—すべての実践的目的のために; *na*—～しない; *śāmyati*—満足して。

ヨーガで感覚を抑制して願望や欲情から逃れられることはまちがいないが、魂を満足させるに充分ではない。その満足は、人格主神への献愛奉仕によって得られるものだからである。

要旨解説

ヨーガは感覚を抑制するためにあります。座法・思考・感情・意志・集中・瞑想などの身体にかかわる神秘的手段を経て、最終的に超越的境界地に入り、感覚を制御できるようになります。感覚は毒蛇にたとえられ、ヨーガはそれを支配する手段です。いっぽう、ナーラダ・ムニが勧めているのは、人格主神ムクンダへの崇高な愛情奉仕をとおして感覚を制御するという方法です。自分の体験に照らして、感覚を人為的に抑える方法よりも主に奉仕をするのがより効果的だとしています。主ムクンダに奉仕をすることで感覚も神聖な奉仕をすることになり、感覚満足のために使われることがなくなります。感覚は向けられる対象を求めています。表面的に抑えても、それはほんとうに抑えたことにはなりません。なぜなら、蛇にもたとえられる感覚器官は、楽しむチャンスがあれば、その対象に飛びかかろうとするものだからです。歴史にもそのような出来事が数多く残されており、ヴィシュヴァーミトラ・ムニがメーナカーの美しさの

虜になって逸脱した例があります。ところがタークラ・ハリダーサの場合、美しく着飾ったマーヤーに、しかも真夜中に誘惑されたのですが、さしものマーヤーもこの偉大な献愛者を陥れることはできませんでした。

大切なのは、主に献愛奉仕をしていなければ、ヨーガ法であろうと哲学の推論であろうと、完成の境地には達成できないということです。主に仕える純粋な献愛奉仕は、果報的活動、神秘ヨーガ、推論哲学などつながりがありませんから、自己の悟りに到達する一番重要な方法です。そのような純粋な献愛奉仕は超越的な質をそなえており、ヨーガもギヤーナも献愛奉仕より劣っています。神聖な献愛奉仕が劣った方法と混じりあうと、超越的質は失われ、混合された献愛奉仕と呼ばれるようになります。『シュリーマド・バーガヴァタム』の著者であるシュリーラ・ヴァーサデーヴァは、この文献のなかで、超越的悟りに到達するさまざまな方法すべてを段階的に説明していきます。

第36節

सर्वं तदिदमाख्यातं यत्पृष्टोऽहं त्वयानघ ।
जन्मकर्मरहस्यं मे भवतश्चात्मतोषणम् ॥ ३६ ॥

サルヴァンム タドゥ イダンム アークヤータンム
sarvaṁ tad idam ākhyātam

ヤトウ プリシュトー ハンム トウヴァヤーナガハ
yat pṛṣṭo 'haṁ tvayānagha

ジャンマ・カルマ・ラハッサンム メー
janma-karma-rahasyam me

バハヴァータシュ チャートウマ・トーシャナンム
bhavataś cātma-toṣaṇam

sarvam—すべての; *tat*—その; *idam*—この; *ākhyātam*—説明した; *yat*—なんでも; *pṛṣṭaḥ*—〜に尋ねられた; *aham*—私に; *tvayā*—あなたによって; *anagha*—まったく罪がない; *janma*—誕生; *karma*—活動; *rahasyam*—不可思議な; *me*—私のもの; *bhavataḥ*—あなたの; *ca*—そして; *ātma*—自己; *toṣaṇam*—満足。

ヴァーサデーヴァよ。あなたはどのような罪にもけがれていない。だから、あなたの求めに応じて、私の誕生について、そして自己を悟るための活動について説明した。私が話したことすべてが、あなたを満足させてくれるはずである。

要旨解説

献愛奉仕をはじめたばかりの状態から超越的境界にいたる過程が、ヴァーサデーヴァの質問を満たすよう秩序立てて説明されています。ナーラダ・ムニは、神聖な交流をとおして献愛奉仕の種が心に植えつけられたこと、その種が聖者の話を聞くことでどのように育っていったかを説明しました。話を聞いて俗世への未練を断ちきったことで、幼い少年ながら、ただ一人自分を養っていた母親の死の知らせを聞いても、それを神の祝福として受けとめることができました。そしてそれを機に、主を探しもとめる旅に出ました。俗な目では主を見ることはできませんが、どうしても主に会いたいというかれの一途な思いが受け入れられたのです。またナーラダ・ムニは、誠実な献愛奉仕をすることで、過去の活動からつながる果報的活動を断ちきられること、そして物質的体から精神的体に変貌したことも説明しています。精神的な体は、主の精神的な世界に入ることのできる唯一条件であり、またその世界に入るのは心の清い献愛者だけにかぎられています。超越的な悟りの不思議さについては、ナーラダ・ムニ自身が余すところなく説明していますから、そのような権威者の話を聞く人は、ヴェーダの原書にでさえほとんど描写されていない献愛生活の結果がどういふものかを把握できます。ヴェーダやウパニシャッドにはこのような話題が（直接ではなく）間接的に描写されています。『シュリーマド・バーガヴァタム』は献愛奉仕について直接言及しており、この超越的書物が「全ヴェーダという木の熟した果実」と呼ばれる理由はここににあります。

第37節

सूत उवाच

एवं सम्भाष्य भगवान्नारदो वासवीसुतम् ।
आमन्त्र्य वीणां रणयन् ययौ यादृच्छिको मुनिः ॥ ३७ ॥

スータ ウヴァーチャ
sūta uvāca

エーヴァンム サンバハーッシャ バハガヴァーン
evaṁ sambhāṣya bhagavān

ナーラドー ヴァーサヴィー・スタンム
nārado vāsavī-sutam

アーマントウリヤ ヴィーナーンム ラナヤン
āmantrya vīṇāṁ raṇayan

ヤヤウ ヤードウリッチコー ムニヒ
yayau yādṛcchiko muniḥ

sūtaḥ—スータ・ゴースヴァーミー; uvāca—言った; evam—このように; sambhāṣya—語りかけている; bhagavān—超絶的な力を持つ; nāradaḥ—ナーラダ・ムニ; vāsavī—ヴァーサヴィー (サチャヴァティー) という名前の; sutam—息子; āmantrya—招いている; viṇām—楽器; raṇayan—奏でて; yayau—行った; yādṛcchikaḥ—望みどおりのところへ; muniḥ—その聖者。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「シュリー・ナーラダ・ムニはこのようにヴァーサデーヴァに話したあと、意のままに、ヴィーナーを奏でながら立ちさった。」

要旨解説

だれでも完全な自由を求めています。それが、私たちが本来そなえている超越的な状態だからです。そしてその自由は、主への崇高な奉仕だけをとおして得られるものです。だれもが、外的力に眩惑されているために自分は自由だと考えていますが、じつは自然の法則にがんじがらめになっています。条件づけられた魂は、地上でさえ自由に行き来できないのですから、別の星など行けるはずがありません。しかし、ナーラダのように思いのままに移動できる資格のある魂は、地上はもちろん、宇宙のどこにでも、精神界にでさえ行くことができます。至高主に匹敵するほど無限に自由なこの人物について、私たちはその自由奔放な境地を想像するしかありません。なにかの理由や義務があって旅をしているのではありませんし、またどこへ行こうとだれもかれを止められません。同じように、献愛奉仕という超越的な方法も自由です。規則原則に逐一従う人が奉仕の機会に恵まれる場合も、そうでない場合もあります。献愛者との交流も自由です。その機会を得る幸運な人もいれば、努力のかぎりをつくしても得られない人もいます。このように、献愛奉仕はその自由性が中心になっています。自由がなければ献愛奉仕はできません。しかし、主に身をゆだねる自由といっても、どんな状態でも献愛者は気ままに行動するというものではありません。精神指導者という透明な媒体者を介して主に仕えることが、完全に自由な生活を手に入れるということなのです。

第38節

अहो देवर्षिर्धन्योऽयं यत्कीर्तिं शार्गाधन्वनः ।
गायन्माद्यन्निदं तन्त्र्या रमयत्यातुरं जगत् ॥ ३८ ॥

アホー デーヴァルシル ダハニョー ヤンム
aho devarṣir dhanyo 'yam

ヤトウ・キールティンム シャールンガダハンヴァナハ
yat-kīrtim śārṅgadhanvanah

ガーヤンム マーデヤン- イダンム タントウリヤー
gāyan mādyann idam tantryā

ラマヤティ アートウランム ジャガトウ
ramayaty āturam jagat

aho—～にすべての栄光あれ; *devarṣiḥ*—神々の中の聖者; *dhanyaḥ*—あらゆる成功; *ayam yat*—～である者; *kīrtim*—栄光; *śārṅga-dhanvanah*—人格主神の; *gāyan*—歌っている; *mādyan*—～に喜びを感じている; *idam*—これ; *tantryā*—楽器を使って; *ramayati*—活気あふれる; *āturam*—苦しむ; *jagat*—世界。

シュリーラ・ナーラダ・ムニにあらゆる栄光と成功がもたらされんことを。人格主神の活動を讃えることに喜びを感じ、宇宙中の苦しむ魂たちに活力を吹きこむ人物だからである。

要旨解説

シュリー・ナーラダ・ムニは楽器を奏でながら主の神聖な栄光を讃え、宇宙中の苦しむ生命体を救っています。物質界にはだれひとりとして幸せな者はいませんし、幸せと感じられているのはマーヤーが作りだした幻想です。主の幻想の力はひじょうに強く、けがらわしい糞にまみれて住んでいる豚でさえ幸せだと思っています。しかし、物質界ではだれもほんとうに幸福にはなれません。シュリー・ナーラダ・ムニは、苦しんでいる宇宙中の住人に教えを説くためにあらゆる場所を旅しています。その使命は、かれらをふるさとへ、神の元へ返すことにあります。それこそが、この偉大な聖者の足跡に従う真摯な献愛者すべての使命でもあります。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第6章、「ナーラダとヴァーサデーヴァの会話」の要旨解説を終了します。